

繪本曾我物語卷之八目錄

佐々木盛綱朝比奈と乞請る話同圖

八幡七郎非義露顯の話

八幡七郎進放せしけ、圖

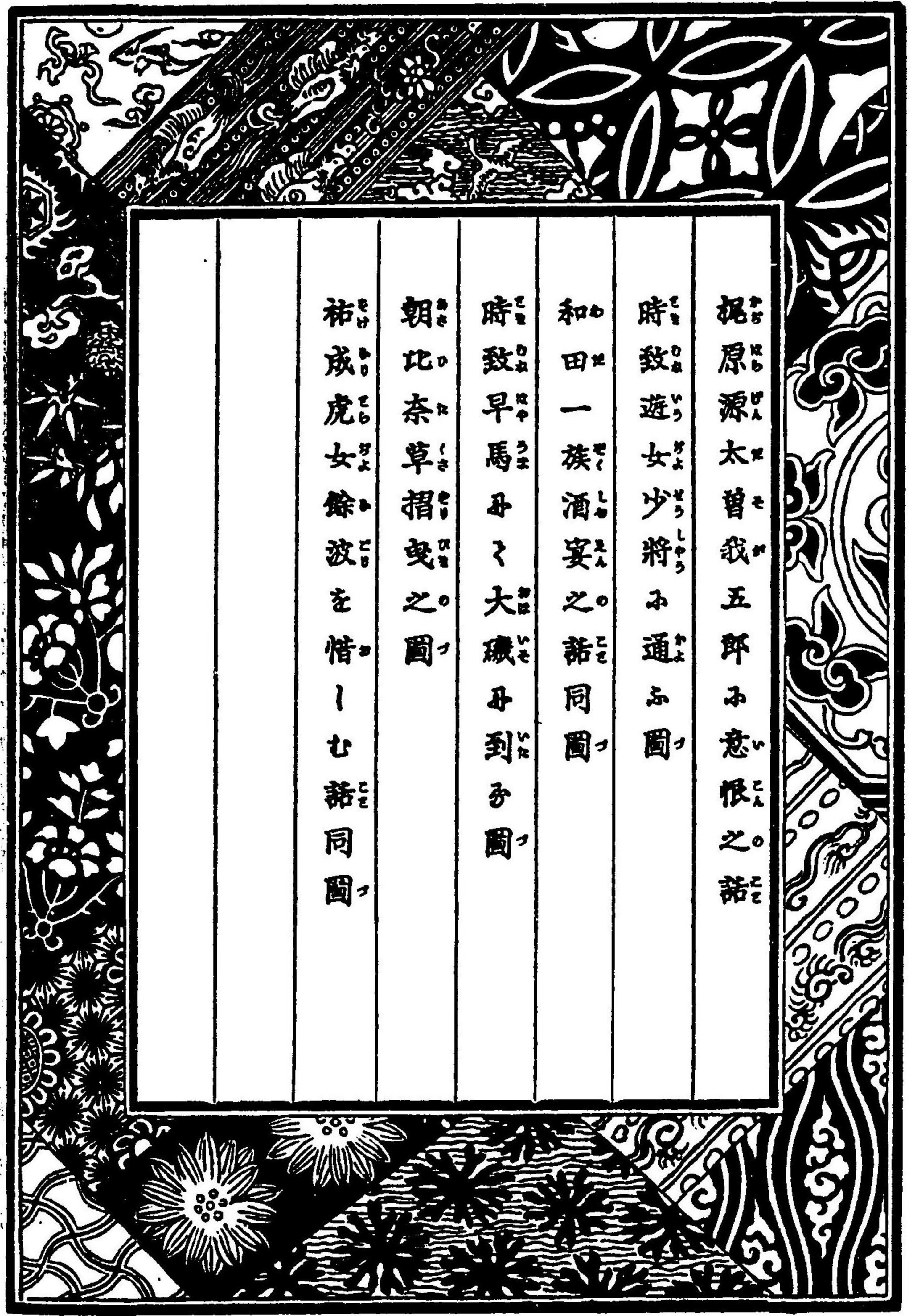
八幡七郎時致み我さる話同圖

那須野三原野御符の話

三原野御旅館之圖

曾我十郎落馬之話同圖





堀原源太曾我五郎ふ意恨之話

時致遊女少將ふ通ふ圖

和田一族酒宴之話同圖

時致早馬母大織母到る圖

朝比奈草摺曳之圖

祐成虎女餘波を惜む話同圖

繪本曾我物語卷之八

木一族乞請朝比奈一話

後守俊兼に預られ身の誤あさの旨巨細に申ひらくと雖も讒者傍に在る是は通ぜ

す斯くの義秀が浮沈如何あらんと一族朋友の輩薄氷を履む心地一落去の程は

ぞ待まざる爰に佐々木三郎盛綱を去年子息信實が事付て義盛芳心せられ一恩

義と報んどの如何にも一此度朝比奈が難と救ばると一族兄弟と語らひたるに何

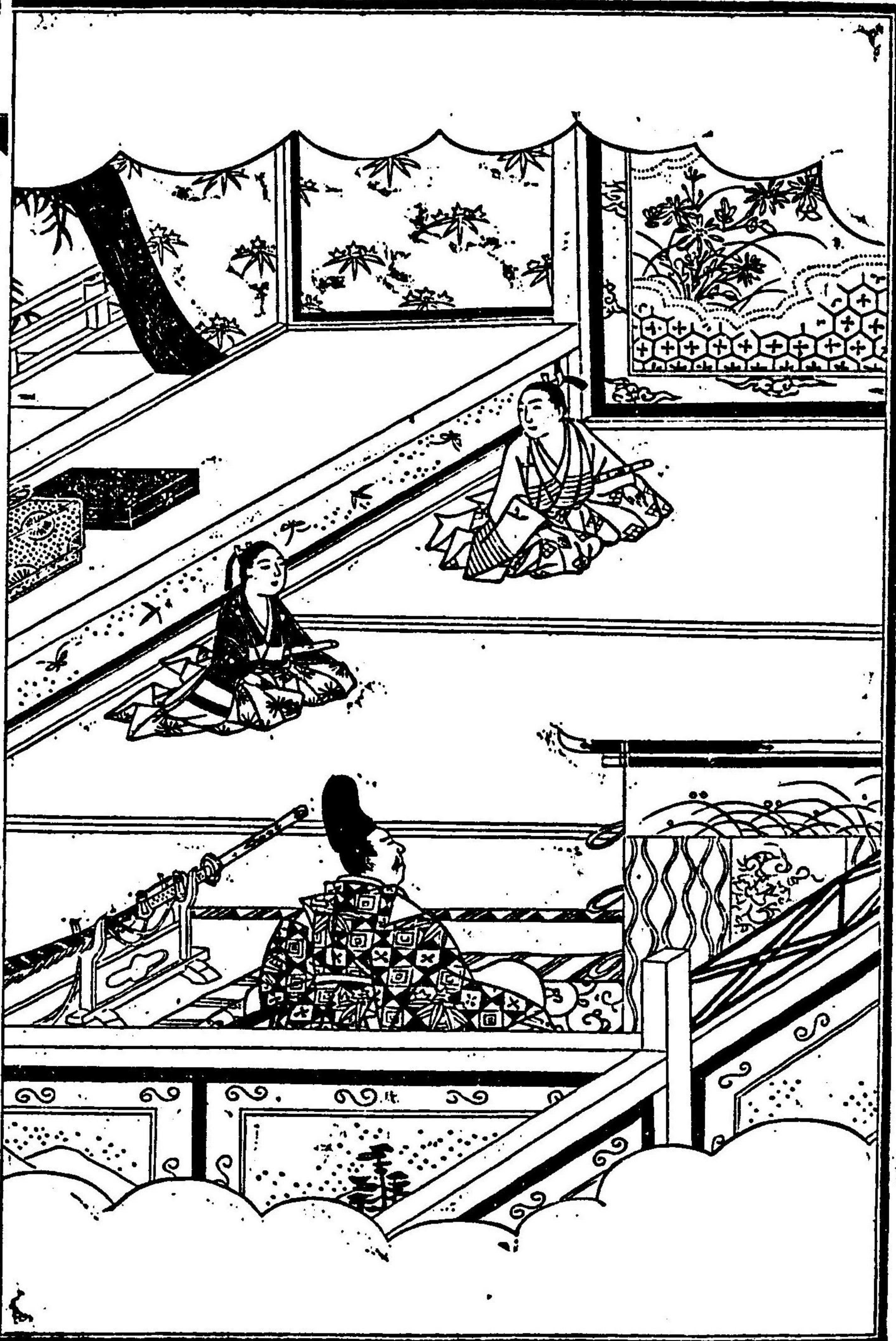
きも同意一く大江廣元はいて新松申々るに朝比奈三郎事曾我兄弟母荷擔一振

籍仕る由母召預らる候事其罪を存せむ候へ共思ふ子細の候へは義秀事其一族の

者共へ下置候様願奉る由申々れば君不審思召ま心得ぬ盛綱が新松う赤義秀



佐々木盛綱  
訴之圖



繪本曾我物語卷之八

三

東京繪本出版



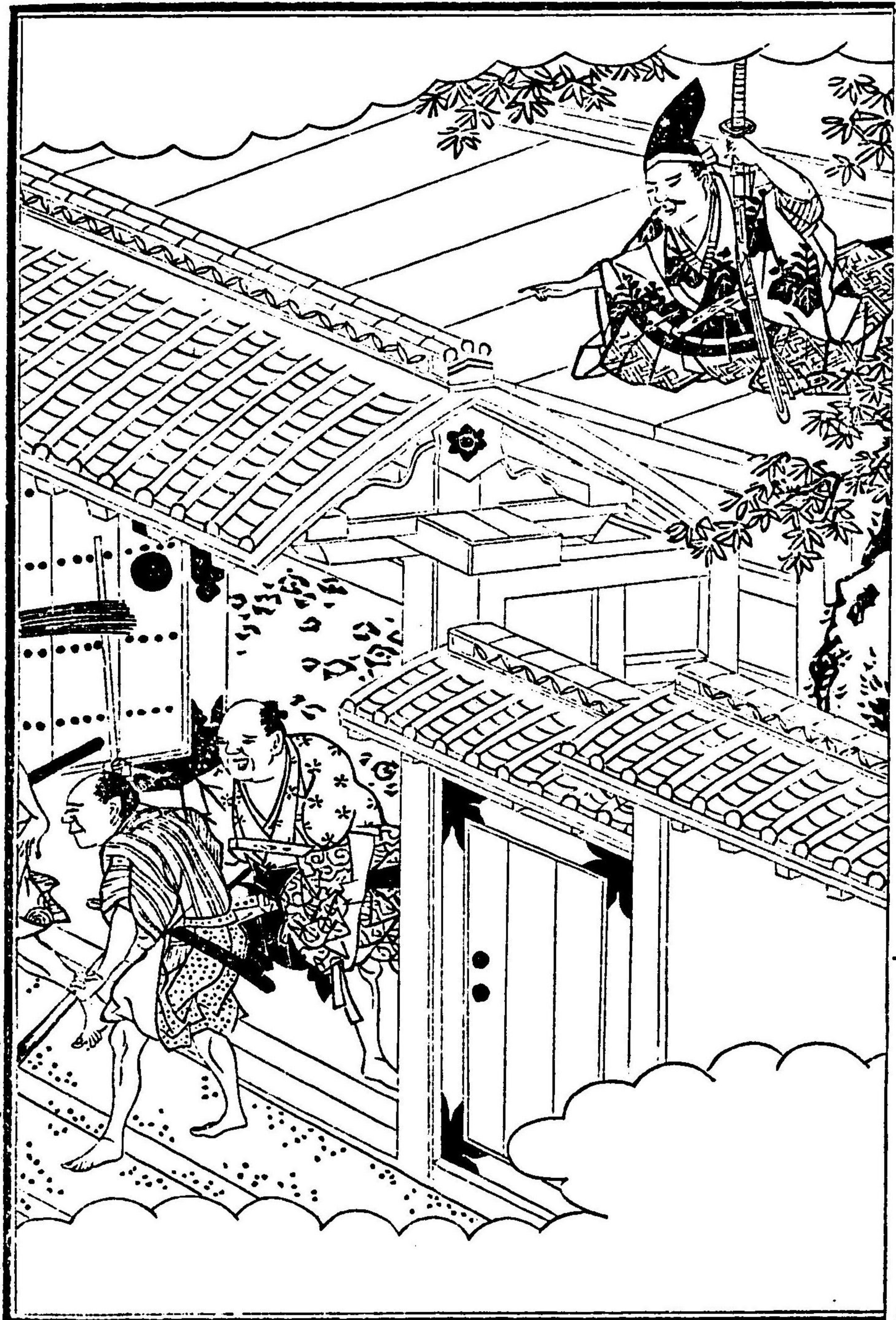
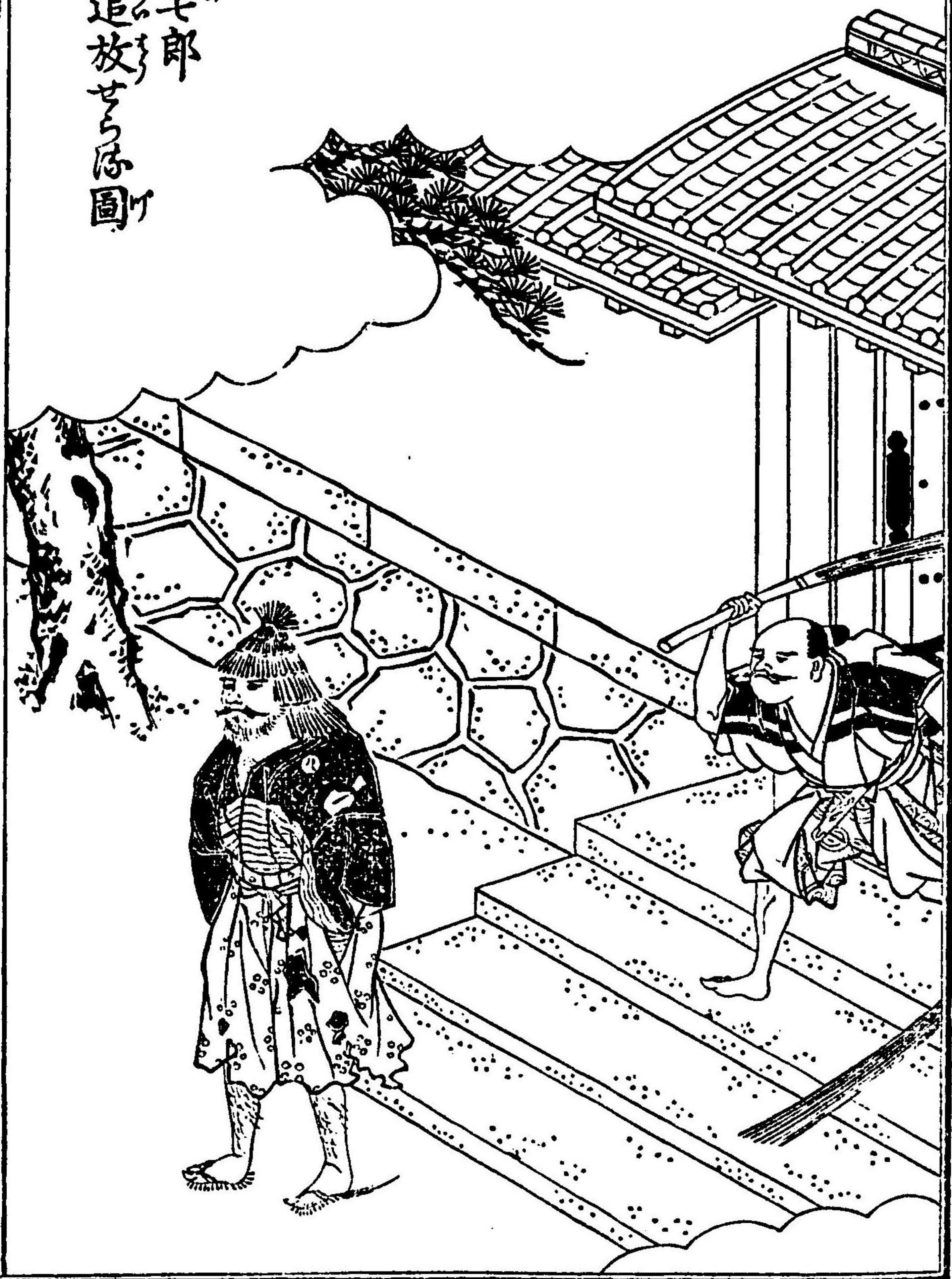
如何なる由緒ありば斯る新証状申せどと御尋有さまは盛綱承りさん以義秀に於て  
 させる由緒も御座おく候得共勇士の本意にまゝ一たもの逆も私母愛せむ他人ありと  
 く能あると撰母捨むとこそ承る義秀若年や雖も能義理と辨へ不道の舉動と仕る  
 べた者一候む此度の事母於て定て子細あるべき儀と存候得共此儀も某が申上  
 べた事母候むは唯々某等が功よりへて下り給りさくおき候へ殊より三浦一族の者  
 共の忠功を思召是此度の儀恩免お下さき候へうへ申されば君はくくを聞召ま  
 盛綱が言の端何とやらん様子ありげ母聞ひまは追て沙汰に及ぶべしを仰渡され佐  
 木の一族退出しりたる跡ふく廣元を召ま今日盛綱が申ま言の端心得がた事あ  
 れば急ぎ富山重忠に仰て朝比奈八幡が理非を相礼べしを仰下されたまは重忠  
 畏て候ひたるが此儀も老臣等一命せらま候様解退に及ぶ所重くの御説母も存む  
 る旨ありて汝母仰付らゆの間速に裁判をべたよ一仰下さる是に依て再び問注所母  
 於て重忠八幡七郎と召て礼問とぞせられ々ゆ

八幡七郎非義露顯話

斯く重忠を左衛門尉祐經方へ八幡七郎と出さるべしを申渡さまされ祐經迷惑  
 一の思へ共力及む七郎は出たる母重忠八幡に向ひ汝の曾我兄弟の者を見知らざ  
 るや何故盗賊おとく搦んといせと尋らまはるる七郎答て申々ゆ某被衆中  
 状見知申さば争論母及び申さむ候得共被衆二人怪れた事よく焼場所被徘徊せられ  
 故咎を申せし所何となく恐怖して逃走られ候母より扱を盗賊おらんと存て追懸候所  
 へ朝比奈殿参られ理不盡に被等状助け刺へ某は斯のど疵を負せられ候ありと  
 いふ重忠聞て汝其時義秀に向て盗ま品数多ありを申せよ一暇と被二人が盗  
 ると見届さるる但一盗賊おらんを推量して追懸しやせあまは七郎答て見届し事  
 の御座おく候へ共用心の折といひ殊に紛失の品も多く候故會議仕るべき為捕んと  
 致せしありと申し重忠聞て汝が非量母盗賊おらんと思ひ一應を理言れし事  
 を然共朝比奈が知人ありを挨拶せし候聞入を其上再三汝が名状問ども云すして



八幡七郎  
追放せし図



八幡七郎追放せし図

八幡七郎追放せし図

八幡七郎追放せし図

五

八幡七郎追放せし図



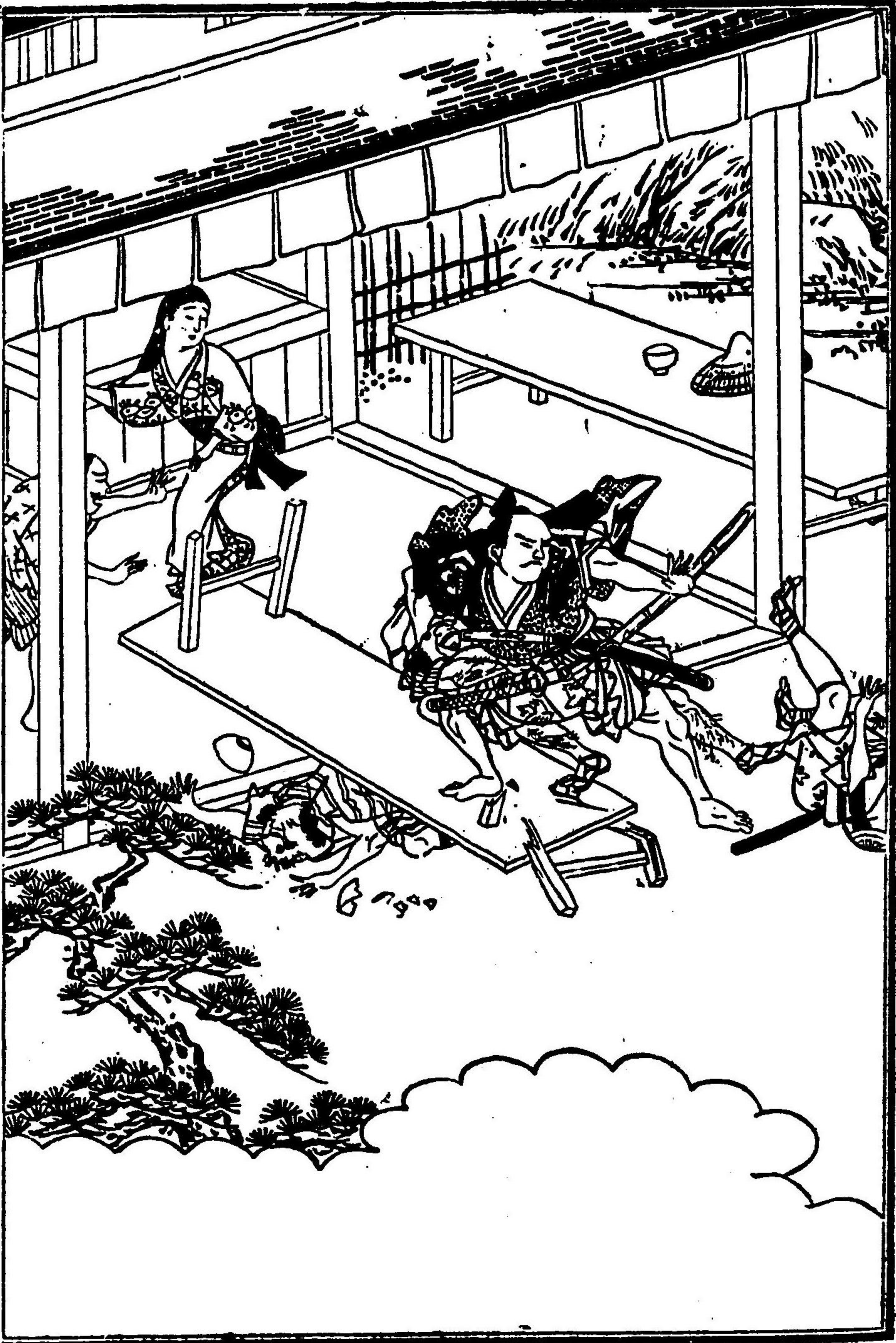
無体母盜賊と号し狼籍し及び一條如何成所存なるや但一列に意恨をありて盜賊  
 食讎母事奇怨以報せん爲の所爲ぬるや有底と申べし若偽りと申はに於くの朝比奈と  
 對論させ急度計ふ旨あり申されたまはば七郎大ひに恐き答る辭亦く終母非分顯れ  
 さまは頼り七郎を追放せられ朝比奈を事故なく免ぜられしは佐々木の一族大に  
 悦び御禮申上られたる祐經も案の外に七郎と追放せられしは益憤りし堪ず如何  
 母もして此怨と報せむやと様々思慮とぞ廻りたる

八幡七郎被殺三時致一話

去程に曾我兄弟を去年鎌倉に於て祐經を移ししは八幡七郎に出合難題を云う  
 けらる争論し及び一所大事に抱し身あるに依て兄弟俱に堪忍を守り其後を鎌倉へも  
 忍びやりふ立越使を求め移ししは既今今年秋の半も成しうと未だ其便を得  
 を空敷光陰をぞ送りたる頃も八月十三日の事ぬりしは今日も鎌倉より歸りけり  
 酒匂の宿母に暫く休居し居たりしが旅人と思しき男六人兄弟の休居る所へはうく

と走より三人を十郎を捕へ三人を五郎ふ懸り無体引立行んとは此の狼籍何者ぞ  
 と答まども物をも言ひて手ごめふせんととまはりしは時致いりけり堪忍も時ふよけべ  
 し尾籠の振廻し奇怪なりを云はば左右母懸り男を両手捕へ向ふ懸り者をまゝに  
 うに蹴りしうは一文計蹴飛され走もあがらぬ倒居ぬ残り二人を片手捌きみ左  
 右へ投付しうは十郎ふ懸りし者も一人を投倒され二人を恐きく逃走する所は六尺有  
 餘の大男側より投打ふ五郎を目掛け切付る時致心得むらうとうのし能され去年  
 鎌倉母に口論せし八幡七郎なりしうは時致喜び已も祐經が郎等成よし日外我面  
 体を打し意恨唯今晴しは觀念せよと投合く戦ひしが八幡もまきもの二打三打を打  
 合しが鬼神をも欺く猛威の時致飛りつて切こむを受えつして八幡七郎真甲二ツ  
 ふ切割れ二言と云を死したりなり是を見く六人の者共恐き怖き連々して進行を己等も  
 祐經が廻り者あらん道はまゝと追うけ行と十郎引とめ彼等討討く何うせん見答られ  
 の事むづうと兄弟打はま早々曾我へぞ歸る此八幡七郎の兄弟が父河津三郎と





八幡七郎  
討り圖



射とめたる八幡三郎行氏が子息ありしが計らむ時致が手お懸て死たりたるこそ  
 不思議なり七郎去年追放し逢いかど祐経が金銀と與へく浪人せしこそ幸ひおま  
 ばうへく曾我兄弟と討くれよと郎等六人と相添へ違へたる故八幡長て去  
 米伺ひ居たりしが今日能き所にて出合しを悦び悔を思ひて郎等に引立させんとせし  
 かども叶ざりし故八幡自身切て懸りたるお却く時致お討ましあり郎等どもも竊  
 鎌倉へ逃歸り此由状工藤告りしうば祐経大ひお驚た兄弟と罪お落さんと思へ共  
 七郎が事の松平事お叶ひは專一の郎等と討まはる胸とさすり知を顔して居たりぬ

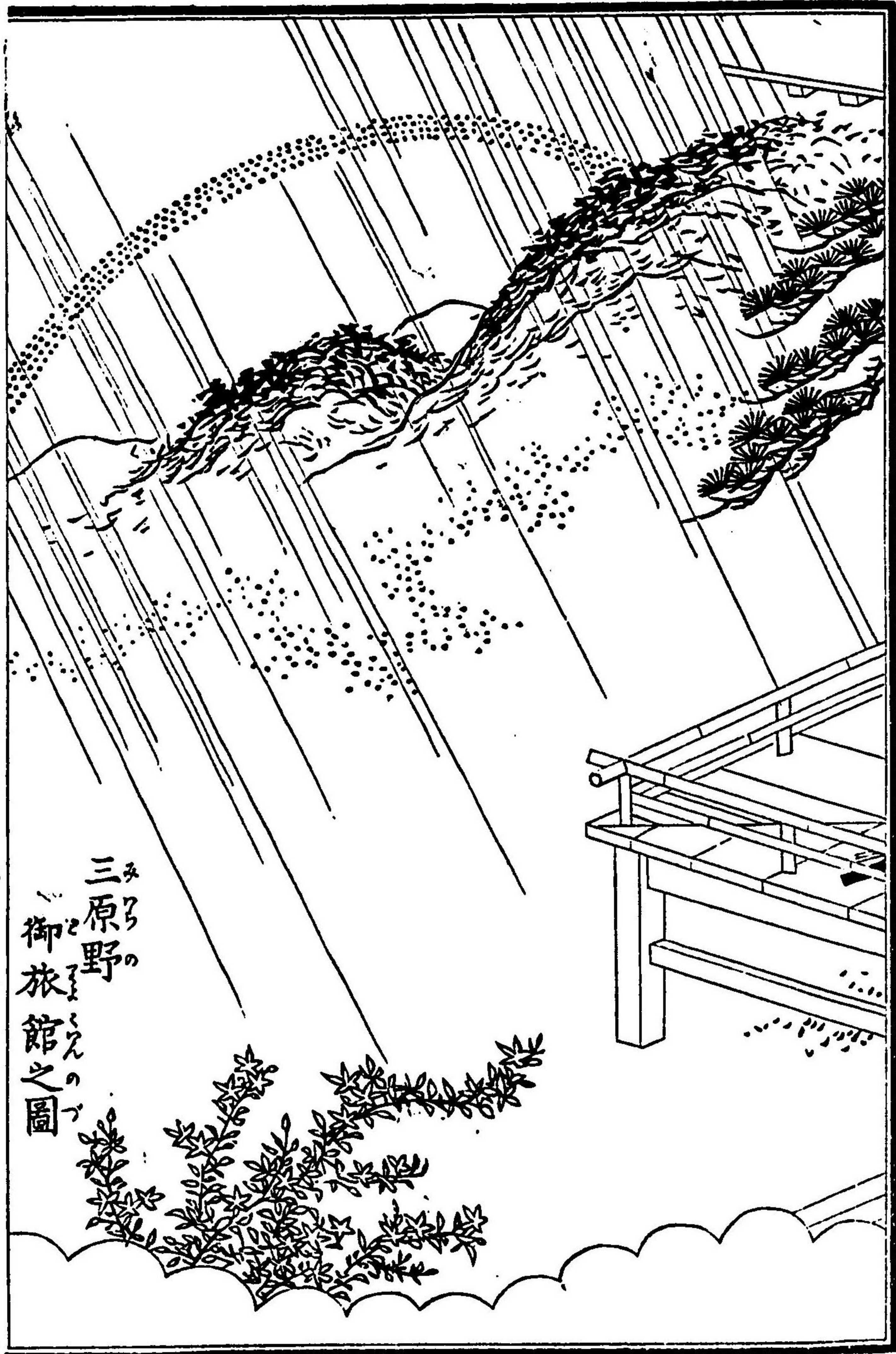
那須野三原野御狩話

去程お其年も暮て建久四年にぞ成り今今年信州三原野野州那須野お於て遊獵  
 せんと仰出され那須野太郎光資母下野國に一所の地と賜り此度御狩の御賄と  
 るべき旨お命せられ先達く歸國せし先給ふ同四月二日鎌倉殿那須野お渡御はし  
 國の住人守都宮朝綱小山朝政八田知家等お列卒お出はせられ命せられ是は依

く各々千人づゝの列卒と出し那須野の原と狩とつる時母曾我の兄弟も究竟の時節  
 あり列卒に紛まき祐経と逢りぬんと兄弟うち連出たるが入間野那須野の間母て其  
 折と得を空しく日數と送々おはされば那須野の遊獵事終て夫より信州三原野お狩せ  
 らゆべきなりしが先漫間お於て御狩あるべしとて曉天より催さる、此所お辰の刻より  
 大雨降り出し今日の御狩と止らまは所詮此所を催し地の地あらしを明日の三原野に  
 赴き給ふべしと御意ある所母申の刻お及んで雨晴しうば直母三原野へ到り給ふ翌日列  
 卒と分られ狩らし先給ふ所より又己の刻時分より雨降々お母を御遊も覺く御残念に思  
 し召さしうば諸將と召さ今日お於る所まで用意ししる所お今更狩と止ん事無念の  
 至あり昔より雨と呼び其例數多あれども降雨お留むる例のおた事母や然も共歌と  
 以て雨と降せば留るも亦爾あるべし景季一首いうやあらんと殿宣ふに源太承り  
 て其どたの及ざる儀母て候得共斯も候らんうとして

されふこそ漫間を降らまはるまらみはらしたまへ夕立の神







君聞し召き當意即妙なりと御感ま〜酒宴と催さる、所ふ午の刻母至く俄母兩や  
 と晴天となりけるふぞ君御悦喜ほ〜景季が歌は徳なるべし折能も詠得る物う  
 なと御感の餘り御太刀一腰景季に賜り再び列卒を御下知あけり頼く狩場へ出さ  
 せ給ひたり

曾我十郎落馬話

叔も曾我兄弟を祐經ふ逢ん爲所々馳廻り窺へ共歩立の更なまば心ふ任せを伯母婿  
 三浦分發澄ふ尋逢く我々狩場見物のたえ且る腕だえ〜ふもと存り参りて候あはは御  
 手の列卒ふ加へられ馬弓矢等思借申度より申々ゆふ義澄健氣にえ思ひ立給へ者  
 うな安き事なりとて即時ふ馬一疋づ〜ふ弓矢取添兄弟へ渡〜天晴の得物とあるべ  
 し隨分心を盡て現ひ給へと申され〜兄弟大に歡び頼て御禮申べ〜と弓矢取持  
 馬ふ打乘人数ふ紛きて打出たり然る母傍より鹿三疋押並んで駈行を工藤左衛門  
 是を見く弓矢をえげ追懸行を時致見付く漫ふ悦び我々が得物あき出候え十郎殿〜

と呼り〜馬を馳五郎が横さゆふ出々ゆを祐經是は知らる一圍ふ鹿を目がけ郎等  
 ふ離き〜只一騎いづく迄もと追く行時致鹿は射む必を祐經の留らん事を察〜工藤母  
 の一段おくれながら矢を放ち々ゆふ祐經も一同ふ切く放せ〜が工藤が矢を中らむ時致  
 が放り箭よて一つの鹿を留えたりされども矢は發せる更一時なりしうは祐經を我射留  
 しを思ひ馬より飛下り件の鹿は取らんとは時致得たりと馬よりかり立たる所ふ後母物  
 音〜てどうと響〜うはふり廻り見まば兄十郎時致が跡より馬を馳〜米り〜木根の根  
 躓た此馬膝は折〜うは祐成真倒ふ落さるふてぞありたる時致驚た走よけ〜十郎を介  
 抱は其隙〜祐經を鹿は取持せ遣〜退た失々ゆ〜兄弟蹉跎し適々盲龜の浮木に遇  
 ち時を得ながらゑ〜敵を討洩ぬる口慳さよ返々も武運はたあき我々が身の上あ  
 り悲けれと天と仰ひて歎〜ける其後所〜方〜現ひ廻りし〜と再び出逢を同仕八  
 日〜の君鎌倉へ還御は〜まは〜より兄弟もま〜と曾我の里よぞ歸り々ゆ

梶原源太與三曾我五郎意恨話





祐成落馬之圖



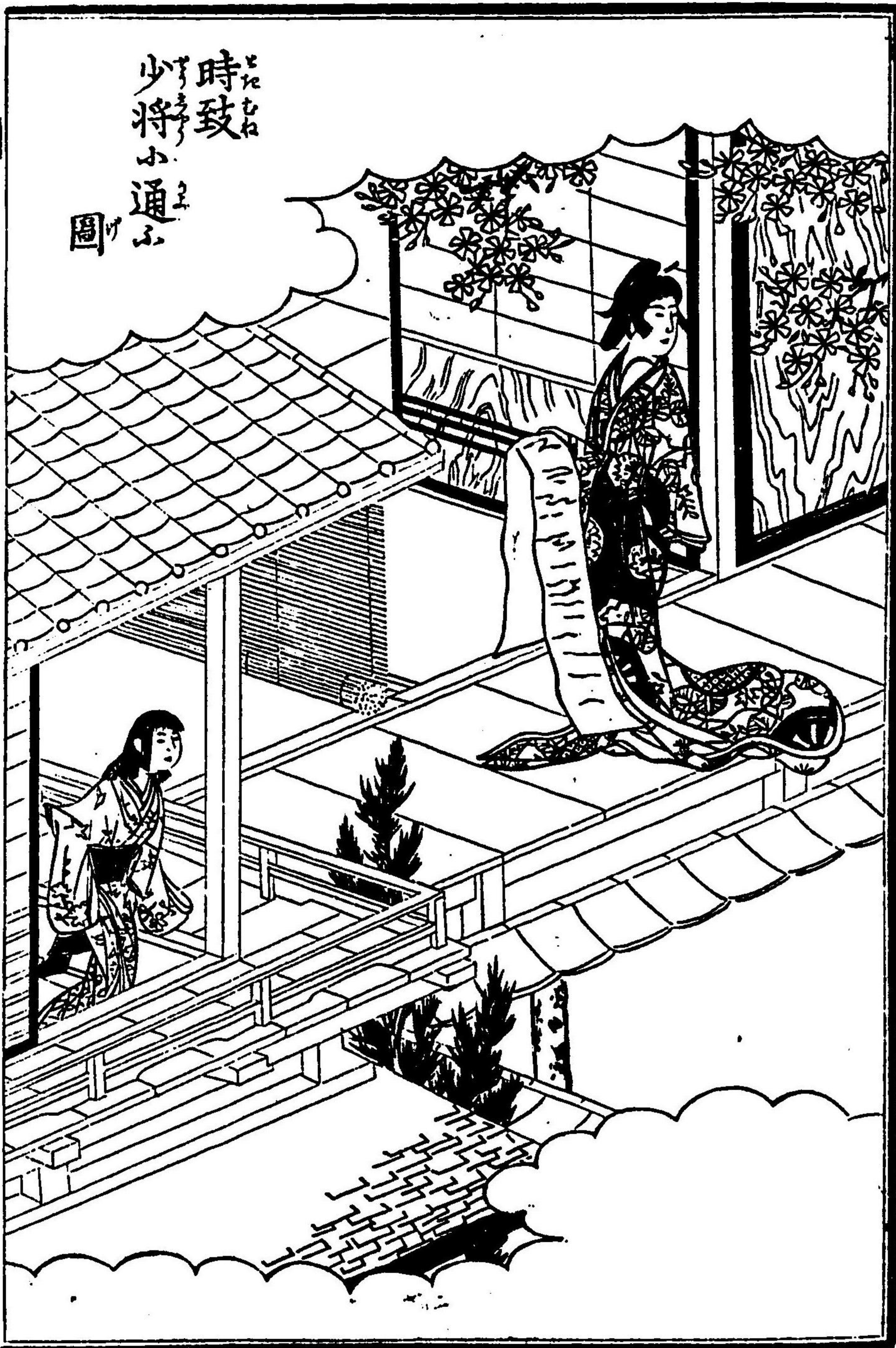


去程一鎌倉殿御歸館ありて後堀原源太景季を召く仰せたる凡諸國名狩場多し  
 と雖も富士野一勝所あらじ次一富士野の狩をまべき此由士共一相觸べき旨  
 仰付られたまはば景季承り斯と申渡りたると曾我五郎此由状聞く兄十郎一申たるを  
 近日富士野の狩をせらばべき旨國々の士ども一仰渡され候ひきながらへと思ふも苦  
 一候へば是非此度も思ひ定め便宜よく御館御前をも憚らむ本意を達一候はん  
 と申たまはば祐成聞くいふも及ぶも一仕損むるのならば惡靈となりて敵の命を奪  
 ふべ一然も此度出く二度生く歸るべうらむ三浦の伯母御前も餘所ぬがら暇乞  
 をもせばやとて兄弟打連三浦へ赴き伯母の見參入今日を限の對面ぞと思ひたま  
 ばせたくる涙と押留えらぬ体ふく暇乞一立出たる兄弟が有様後ふぞ思ひ知れ  
 り斯く兄弟三浦より歸るさふ大磯に立よりて虎女み見參せんといひたまはば然候べく  
 候此度出く永た別きふてもや候はん時致も粧坂の麓ふ知る者の候ふ再び逢見む  
 事計難一是より彼許ふ立寄明日參會申さんとて兄弟うち別き十郎の大磯へ行ふ々

り五郎の一夜を明一翌日は鎌倉を出て腰越より片瀬の宿へど通りたる折節堀原源太  
 左衛門十四五騎みてかの宿一かり居たりしが五郎が通るを見く申べき子細あり  
 く留給へと足輕を走一む五郎兼聞る事あまは指當り急事候えれば後日一見參  
 申べ一とて通りにたり景季を定く五郎の留るらんと思ひく片瀬川をうけ渡一向の  
 岡一駒うちあげ見たまはば五郎の遣一打延ぬ景季をかく跡を付く追たりし一五郎の斯  
 とも知て平塚の宿一下居く馬の息を休えたる所へ景季打く来りたまはば五郎早くも見  
 付く惡うりとや思ひかん急ぎ駒引よせ裏道より身を忍び曾我の里一ぞ歸りたる景季を  
 爰まで跡を追たまはば共逢ざりけれむよ一今日一限るべうらむ此上を尋るよ及むとて  
 手綱かひくり通りたり抑此意恨の起を尋る母粧坂の麓に少將と云る遊君あり時  
 致情をかけ淺うらむ思ひ一引手あまら此事たまはば堀原景季演出去歸るさ一此女の  
 もとにうち奇夜と一も母遊びく曉歸るとていう々志ざりたまはば腰の刀と忘まき出ける  
 と女のもとより刀とけうの一たるとて



時致  
少將  
小通  
圖





いとぐとてさほつ刀とさする、いれこもれとや人の見るらん

景季馬ふ来ぬやら弓手れ鑑と路もあどさむ返歌とぞまさりる侍

かゝ見とてとたぐあしものそれま、ふ返はのそ社さほが成なれ

其頃景季も和歌に達人と稱せられたるが扱も此少将が歌に面白きよと思ひ初くよ

り深く通ひ馴まゝあき者とぞ思ひたる五郎も是とば知て彼もとに行尋ければもあはざ

りたれを何よりてうと心元ぬく友の遊君母問々せば頃日を梶原源太殿のとりきり

て餘の方へも思ひもよらむと申々せば五郎聞て流とた川を遊びもの頼むべきよあらは

ども世にある身ならば源太と思ひ替られし質を諸道の妨とい面白うりたる辭うぬ人

とも世はも恨べうらむとて此歌と録置く出ぬ

逢ふと見る夢路よとほる宿えがれはうた言葉にまゝも歸らん

せ書ひき結びく置りたりたる五郎歸て後少将立出されば結びたる文有取あげてみせば

日来馴に五郎が手跡なり此歌ははくく見て友なる遊女に申々るにさなれどふ君

が一夜の情ふ百歳の命はも願ざゆを女も常ぬるを況や五郎殿の此日来淺うらざ

り情の程争う餘所ふもるべたなまど流は立立る身の悲しき思ひぬ方おせうれく深

き心を失ふぞや去母ても五郎殿の自を甲斐なれ者と恨給ん最おさよせ文を顔ふ

押當潜々とあせ泣ふたる其後源太度々通ひうども引籠り逢をいて有たるがあぢ

たなま身を觀いて

數ならぬこ、俗の山は高たればれく乃深きをたづひこそいま

まはる身おをを思ひてと成えのいどふよといまぬ情なをたり

新詠にて生年十六と申に誓押切諸國修行ふ出たるが後お大藏の虎が柘母尋来り

俱お行ひをほして八十餘の齡を經く大往生を遂とぞされば景季も少将がか、お舉

動をなせしも偏お時致が故なりとく安うらぬ事お思ひ何處母もあま行逢ん所おく此

意恨を晴さんとして平塚まで追さりたり然るお時致も此時既お景季と討果べうりしを

此年来甲斐なれ身を惜まはるに景季が爲おあらむ父の孝養お備へたる命なまは祐



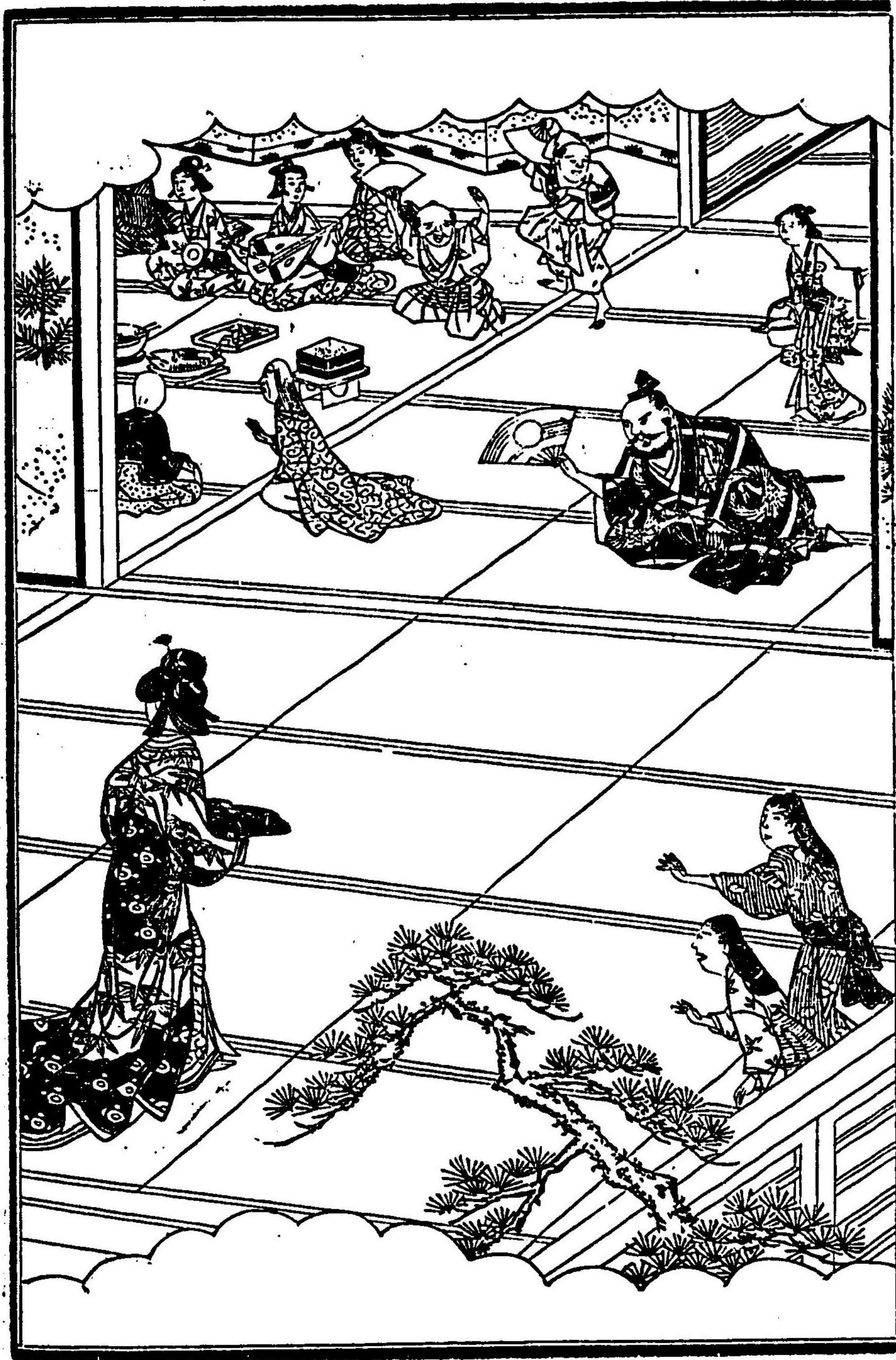
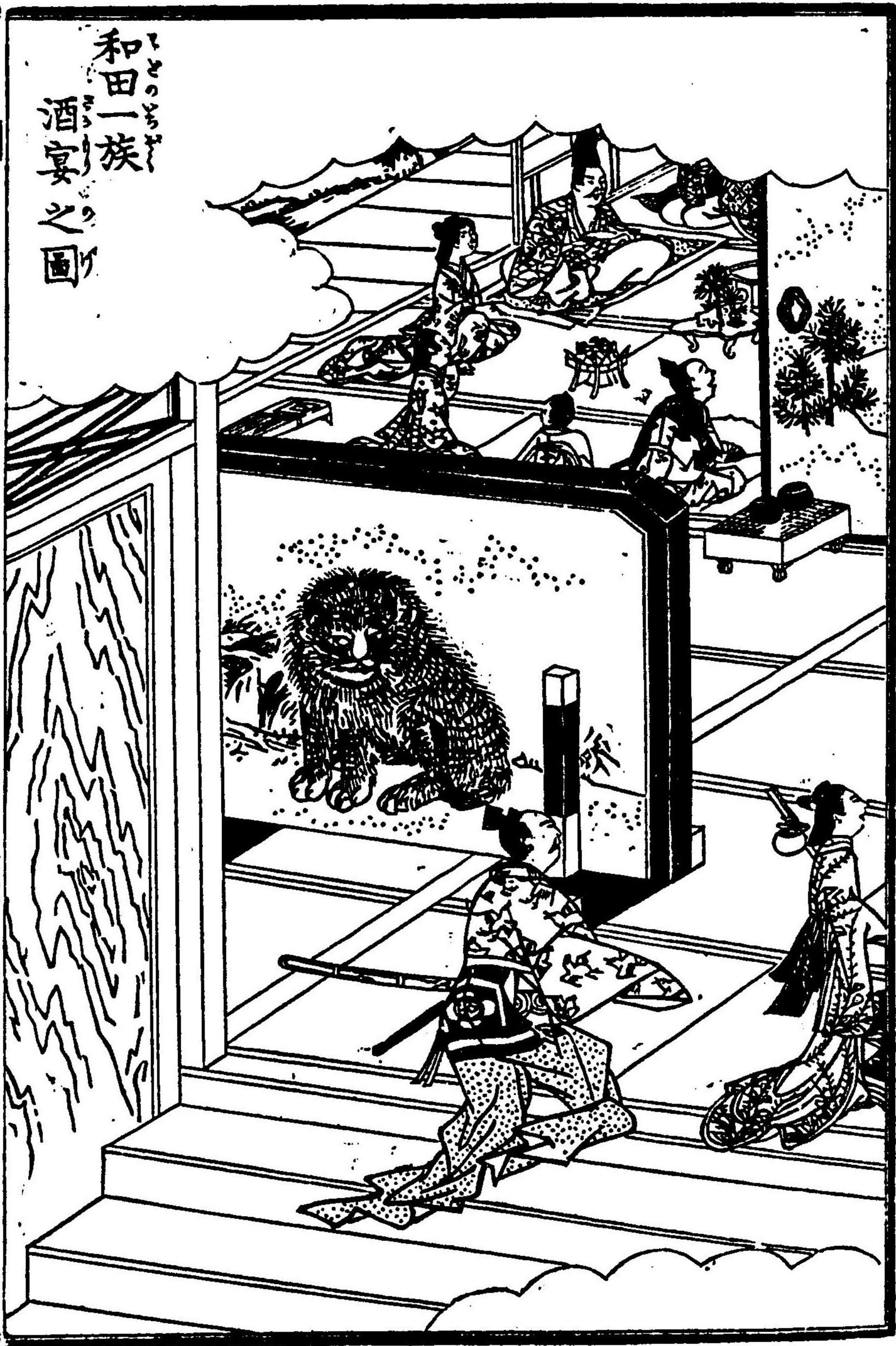
經ふことと思ひく止りたり是を見聞人も五郎が卑怯の行跡なりといひたまはども敵  
 祐經討つ後鎌倉殿の御前より引居られ一時景季ふ向ひ和殿を年米時致ふ意趣ある  
 由今の敵を討さむ某が身身聊も思ふ事な一本意を遂よくといひたまは景季え  
 つと赤面一御前を退立時致が有たる程を御前へ出ざりたり時致を和田畠山左右母  
 あり々は其方を見やりて笑を合さけるこ理過く覺えたるこれや松柏を霜の後ふ顯  
 き忠臣の世の危きふ知るゝとい此時致が類ひをやせ今お思ひ知さされ  
 衆る母舊本曾我物語の時致が情をうけ一粧坂の遊君誰を名状記きを同書に手越  
 の少將といふ遊女後大磯の虎女と俱ふ尼と成同居せし由状記せり文意を考は母粧  
 坂の遊君といふ全く別人なり然ふ人口ふ難爰を所粧坂の少將といふ同名別人な  
 るや又手越少將尼と取りて虎と同居して事似たるをもいづ名を混したるもの歎此書  
 兒女の記一安からんが爲まばらく世に傳ふる所ふ随く少將と記して後  
 の勤へを焚而己

和田一族酒宴話

去程ふ曾我十郎祐成も大磯舟行て虎女が許ふ入まは虎女頼く出迎へ例の所ふ請り  
 入いつくよりも睦しく語りあはれぬ世の中は夢も現かと思ひ居たりし所ふ思ひの外な  
 る事お出出来にたれ其折一和と田義盛一門の人々と俱に此所と通り々はが一門の  
 人々ふ向ひ申やう都の事いざまらむを辭ふ於ては黄瀬河の龜鶴手越ふ少將大磯舟  
 虎とて海道一の遊君ぞか一献を、老く通らむや朝比奈三郎義秀古郡左衛門  
 胤氏と始として一族八十餘人彼長が許ふ入来まは長料あらむ悦び虎に劣らぬ女  
 房ども三拾餘人出立せ何事も座敷に居あがれ既酒宴を始りたるされども虎を座  
 敷へ出されむ義盛心得を思ひく此君達もさる事をきと虎御前の見參れ爲なりぬどや  
 見へ給ひぬやいひたれば母聞て此程煩くしてといひあが座敷と立虎が方へ行何と  
 て遅く出給ふぞ疾々や言置く母を座敷へ出虎を只今ぬあり候といふふ義盛を盃ひり  
 へ今やと待ども見へざりたり虎の始より十郎ふ心と無て座敷へ出ざりしが母の諫を頻



和田一族  
酒宴之圖



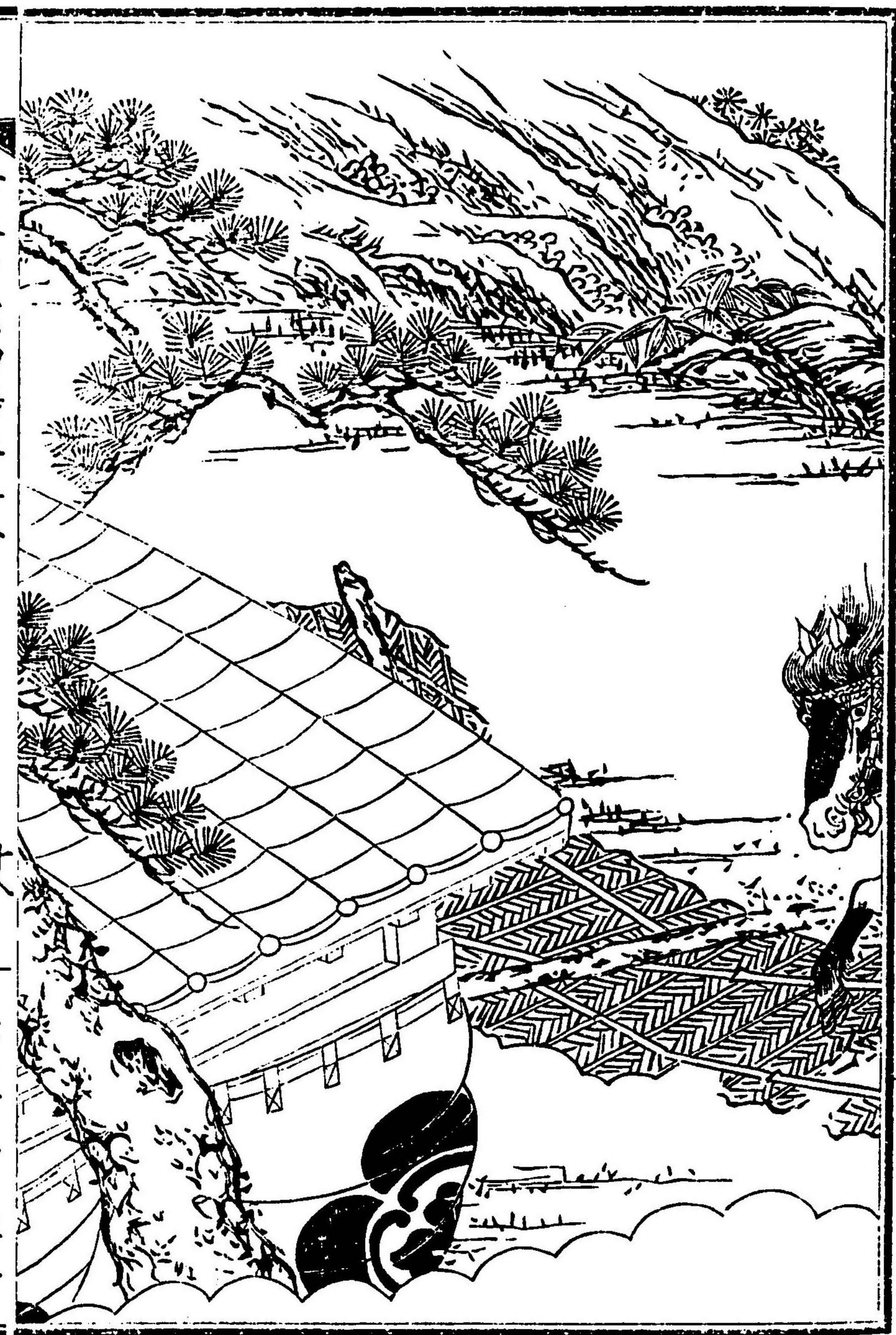


なまは如何もせんを察るに夫の心は思ひしれを母の命に背く母の心は從へば時の罽羅  
 ふめづるふ似たり彼方を思ひ此方か思ふ母を身一つふとたがごとく衣引被き臥居たり  
 義盛も餘り不待りび氣色と損じて見えなれば母も氣の毒身も餘りて曾我十郎殿の在  
 まはがさてや出らぬ申奉らんといひたれを和田聞かぬ十郎の在るとや何うの苦  
 うるべき朝比奈奈りて二人とも迎來よせ申母ぞ朝比奈座を起虎が局へ行たるが速  
 應深き男なまは左右なく居間うち入らぬ無骨なりと障子に隔る外面より是ふ  
 曾我十郎どの、御入の由父義盛承り候て御迎のため朝比奈を進らせ候何うの  
 苦く候べき御出ありて一献きこゝめさき候えうゝ夫亦某一期の所望おきあり候御  
 ぜんの事のかゝた事ふ義盛思ひ候が然るべく諸共御出あつゝ父が所望をも叶へ  
 義秀が面目施し候様御計ひ給はるべし一向願奉ると申々まは十郎聞て頼とい  
 ふふ黙止がごとく左右ふや及ぶ朝比奈殿争う異儀を申べき起給へや御前祐成も出ん  
 とて烏帽子は、をわし立直垂の衣紋引繕ひ虎を先ふ立く三人打はき出されれば義

盛嬉し氣にして申々るの扱も十郎殿のほくくたるや餘所がほくく心は隔給ふものう  
 お御入を知て候ひ始より申べうり候るものを是へくと請せらば十郎虎も座ふ  
 候るば盃まへふぞ置たりたる義盛虎をほくく見て聞ひ物の數をらむか、お者の  
 有たるは十郎が心を無ういでざるさへをゆゑを覺るふや何とぬく盃取上り面々母廻  
 し其後亂舞ふ成るこ、ふ又始たる盃虎が前よぞ置たりたる虎其盃取上りを今一  
 度と強らきて受持たるが義盛是を見くいうに御前其盃何方へも思ひ召ん方へ思ひ  
 ざし給へこそぞ真の心ぬらんと有たれむ七分ふ受たる盃千々ふ心とはうひたり  
 和田ふさしたらんを時の賞翫異儀ぬしされども祐成の心の内をづう一流きと立る身  
 なりとして昵一人とうち置此盃義盛ふさ、む事本意ぬらむ祐成ふゆゑ座敷ふ事  
 起りあんよく是も前世の事思ひさば事あらば和田の前下にさし給ふ刀を替わらぬ  
 が物よ支体よく奪ひ取一刀刺とよもかくよもと思ひ定めて義盛一目祐成一目心と  
 候うひ業々たり和田を我よならてと思ふ所よさはぬくて許させ給へ去迎は思ひの方



時致  
大儀小  
到不圖



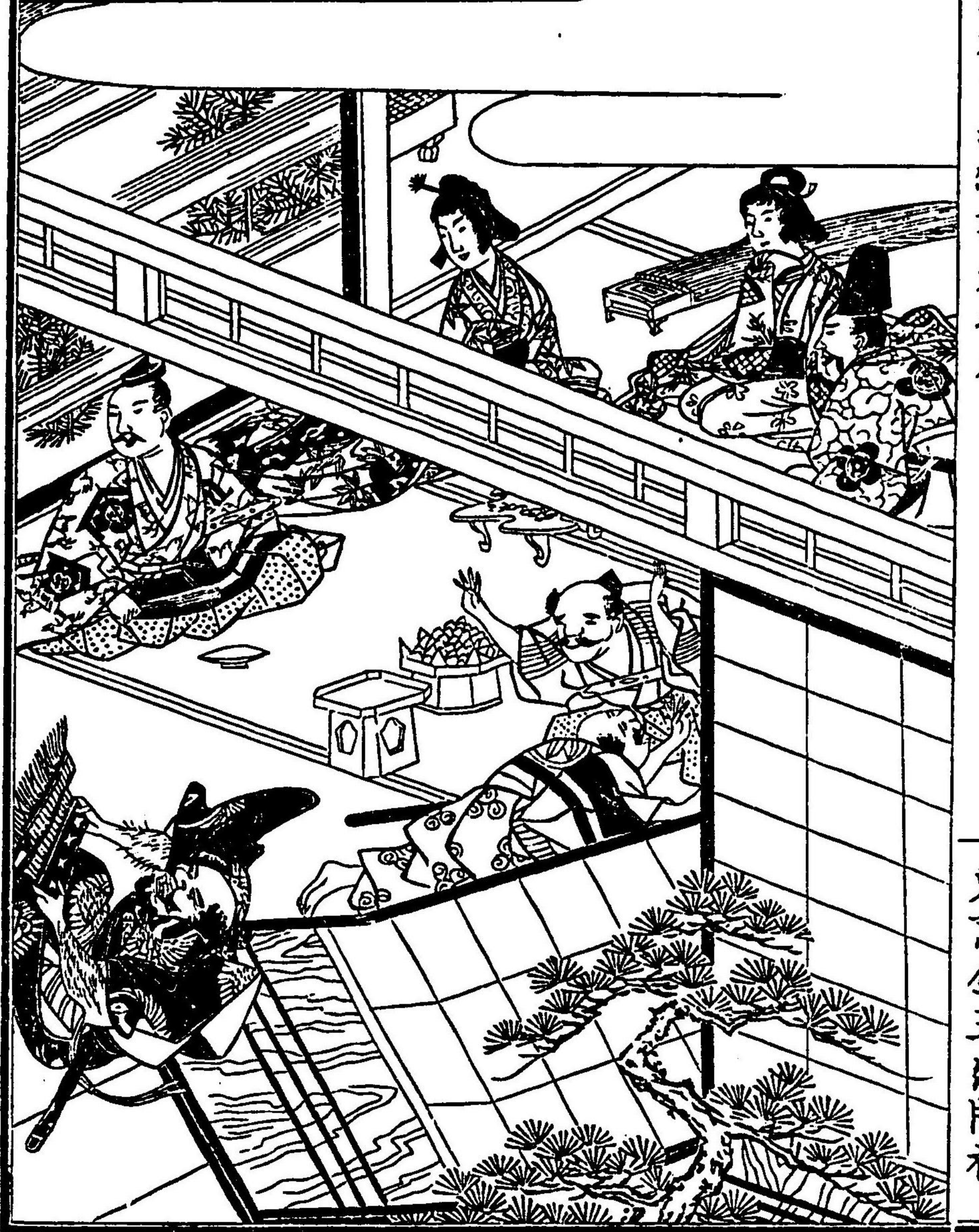


とせうち笑ひ十郎はこぼれたりたる一座の人々目状見合せ是の如何と見る所は祐  
 成丞とり上て某給のらん事根籍は似たり是をば御前にといふ義盛聞くと志は横  
 取無骨なり争うさるべき早々と志さだいへさびと解をべきはあらざれば十郎丞取上  
 三度ぞ酌む義盛居丈高は成歳程物憂事な義盛が齡二十ども若くは御前母  
 のそむうまひ一且嫌る、共箇様の思ひざし餘所へを渡さしをを以の外苦々  
 敷ぞ見えみたる爰は五郎時致を曾我は在て父の爲は法華經よみて本尊に向ひ念誦  
 志たるが頻に怔忡志たりたり心得ぬ今の怔忡やいうさほ十郎殿は大磯へ行給ひ  
 が身の大事や起りけんを心元なく思ひたれば帳臺は走り入緋緘の腹巻とつゝ引  
 け伊東重代の四尺六寸は赤銅作の太刀十文字母結びさげ鞍おくべた間をけさば裸  
 脊は打乗は餘町は其程を只一馬場に駐付十郎殿を如何と問は和殿を盃を論  
 べて唯今事出来ぬと申はされむと夢と思ひ透垣をえ縁超兄の居たりし障子を隔立  
 りしが時致これに在を知らん爲に筈は障子越は袴の着際をゆゑさば十郎誰や

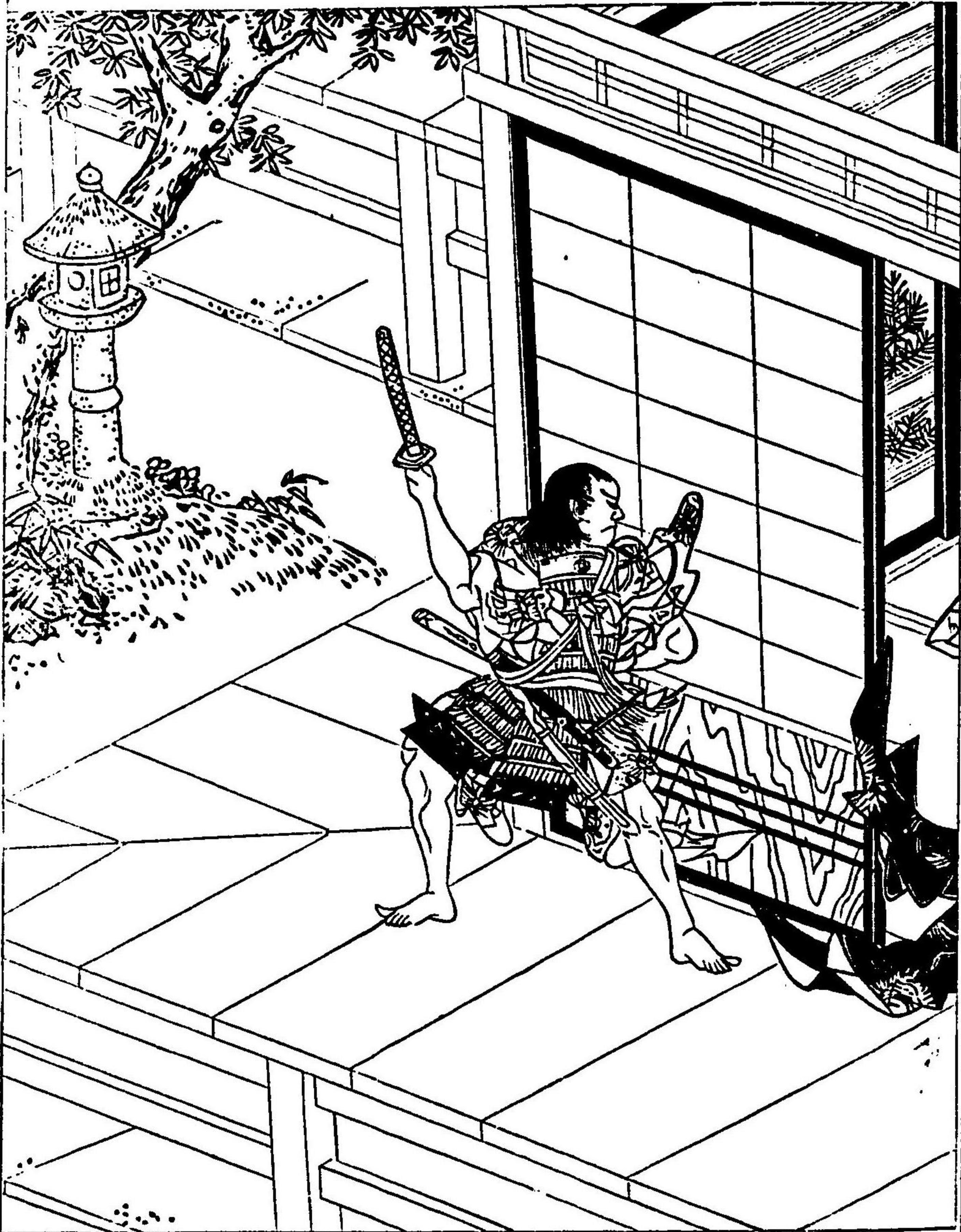
問ふ五郎小舟にありて時致これに在といふ十郎聞て千万騎の兵と後もちとるよ  
 りも憑敷と思ひたは義盛の聲として上もぬく振廻ふとのやを聞えたまは祐成の更ぞや  
 心得何事もあらは障子一重踏やぶる飛込んをえれと思ひはつ立たる姿夕日の影  
 よて障子母寫りたまは朝比奈是を見く實や渠等兄弟を兄が座敷ある時を弟が後  
 は立添弟が座敷ある時の兄が後在て影身の添が如きとやいうさま五郎は後  
 在を覺りさばうりの更は大事引出しては母の益うあらん何となれ体は座をおさめ  
 何事も無事に立むやと思ひは一月いごしたる扇とむらた何とをらん御座敷志づまり  
 たり歌へ殿原難せ舞んとて義秀柏子を打立させ君が代を千世は八千世は石の  
 と志ぼりあげていたはと取りて苔のむすまでと短く舞て納たり斯く舞も遅ぬれば五郎  
 が立たる前の障子を引あげこれを按は遠を時致を二王立母はつ立居たり朝比奈あ  
 やほを狂言ととりなして客人まはほまぞや此方へ入らせ給へせて草摺貳三げんむ  
 すと取り引たれども少も勳を磐石なりとも義秀が手拭うけおは勳うぬ事もあるべ



朝比奈  
草摺曳  
之圖



東宮御所  
五出陣



繪本曾我物語卷之八

廿

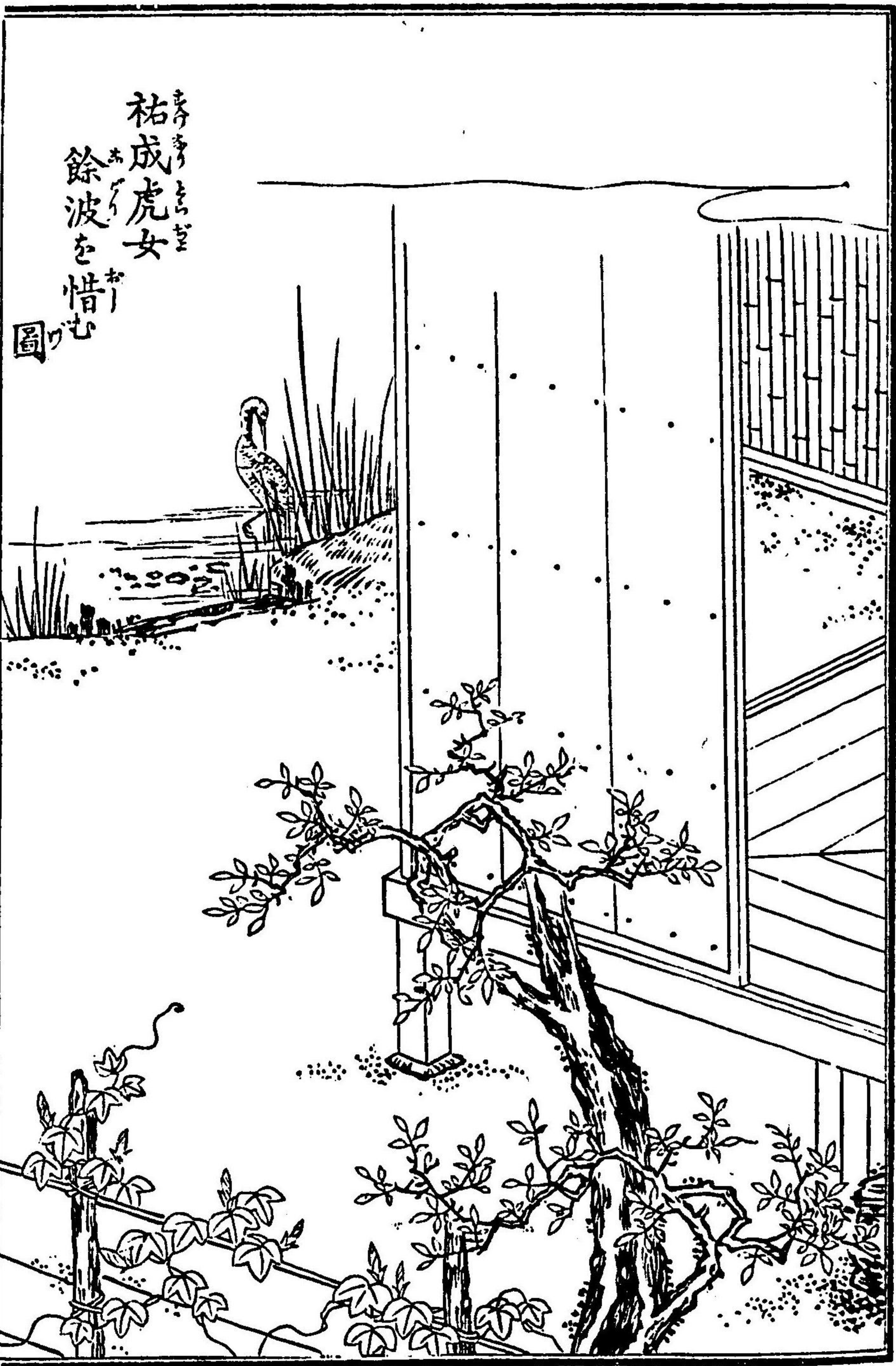
東宮御所  
五出陣



きた力ふ任せ曳やくを引々共五郎を元れとも思ひひむ曳ともぬく曳るゝともおくあ  
 ざ笑ひてぞ立さり々は大力ふ引きて横縫草摺ころへむして一度ふ切きて朝比奈の後  
 へどうや倒さしが五郎を少しも働うて枯木れどくおは川立たり扱おき五郎時致をみ  
 ざの勝りれ大力を餘所の人迄知りふ々朝比奈も打笑ひこれへくを諸をまばあは  
 りの辭退も無禮なり異体を御免候えといひく座敷へ打通り朝比奈が下なる疊に  
 坐々まば朝比奈頼く義盛が前ふありたる盃と五郎が前ふ置たるを時致盃とり上  
 て酌ふ立さる朝比奈にまきだい御盃の前後も遅參れ無禮御免あませて三度迄  
 おせほしたり々れ其後數献めぐりて五郎扇まやくお取なほ今暫くも居申べきまき  
 共曾我ふ指當御用の候得む後日ふ恐きを申さんとて兄諸共ふ起けまば虎も同々起ふ  
 たり一座も不興至極ふく各々座をたち和田を鎌倉へ通り々れば兄弟のうち連く曾  
 我へ迎こそ歸りける  
 接ふ和田義盛も曾我兄弟とい親一き一族さる上兼て兄弟の大望ある事を察し餘

所おがら力を添る事前の條見えたり又兄弟も和田が懇情を感むる事淺うらむ然る  
 ふ此盃を論じ憤りを含む意甚だ不審因く諸書を校みふ此酒宴の事を偽作と  
 一或る朝比奈を巴が子といふる非ありとし又時致の草摺を曳力競の事い非ふ  
 て義盛謀叛の時鎌倉の軍中に朝比奈敵れ鎧の袖を曳ちざり一事を誤傳へと  
 るものとも云諸説區々ふして決しがた大方を非あらん歎又一書ふ和田盃の圖として  
 出せるものあり其圖甚だ古雅ふして近世の物と同トからむ此酒宴ふ用ひさるもの  
 歎又七義盛平生愛せし物ふや其是非を知を然共此酒宴の事久敷世ふえてたやせし  
 事おまば是非の議論ふ拘らむ舊本曾我物語の趣きふ據是れを録し猶後勘有べし  
 祐成虎女愛餘波一話  
 斯く祐成を虎女を具して曾我ふ歸り常に住たる所ふ隠し置毎より細々やうち語り  
 此度御狩の御供申思ひもの尾越乃矢の中を命を失はん事有問敷くえあらむ身こそ  
 貧ふ生体とも對なる塵れ見苦しけよなど人の謂んも口惜しけれを髪結直し給きや鏡





枯成虎女  
餘波を惜む

圖



小向ひ座一々れば虎を何心なく後ふ廻り暫く髪を梳たるが祐成夫といふ共此年  
 月睦一契も今を限を思へば猛き心も亂れ没し落涙せし面影前ふる鏡も移々まひ  
 虎怪とて何事やけりかろを落涙せさせ給ふぞや心得なきよ語らせ給へと申々まは十  
 郎今更何せういふべたと千々れ思ひふくれけるがされば某が祖父入道も君の御敵  
 されば其孫として君母も召仕まを御恩蒙る事なかりはして先祖の本領も年月餘所  
 見おほ上馬の一疋も毛ぶごううに飼を又父の爲お經巻一部書もせむある甲斐もあは  
 身を以て人母交んも面ぶせなれば此度御狩より歸おは出家を遂頭陀乞食して靈  
 佛靈社に参り父の後世をも弔ひ我身をも助らんを思ひ立し上は是ぞ今生の對面限  
 せ覺ゆまはありぬ別の去がさくて申々まは虎聞もあへむ十郎が膝まか、り暫の物  
 も云ざりしが稍ありて恨や問をい知せじを思召はりや實安の大穢の遊君没ま  
 死者の子なまは誠の道をも思召しあま共女れ身のえかおき身にうへてもとこぞ思ひ  
 奉ま相見え初よりぬどやらん思ひの色深く露忘る、便もあし御豫言のたがふを

偽りふ又なるらんと心を盡し待ましに左様と思ひ立給は、童え同じく髪を剃落し  
 墨の衣ふ身をを一つひとつ庵ふあらばこそ外に庵室引結び衣を解きて参らせん香を  
 備へ給は、花を摘み薪を拾ひ給は、閑伽の水を汲み一蓮の縁はも願はん其昵びをえ  
 否と宣は、山々寺々を修行して餘所ぬがら見奉らん夫をも猶憚おぼし召は、湘河ふ  
 身を沈え一日片時も存命トとて涙ふ咽び申々り十郎はまぐと按むるふ是程思ひ  
 入るる心ざし露程も知せむして心強く隠遂ぬるえのぬらば長た恨と成ぬべし去ばと  
 て人ふ淺をぬせいのん事とあどふやまべき其上日數なけれむ知せむやせ思ひ此事母ふ  
 だにも知せ奉らで過かども御身の志し切なきは誠をありし申は、ぞや餘所は淺ら  
 し給ふべうらむ賢も出家遁世ふくもぬし年来祐成が身母思ひありといふまらゆべし其  
 本意を遂んと思へば此度出く後再び歸るは、たれば逢見む事も今夜計へ扱し何と  
 ぬく申契く時の間と思へ共三歳になりぬ奉公の身ならぬば御恩の時とも云まを廻船  
 の身ならぬば利の有らん折とも云まを何思ひ出もなれ祐成ふ此年月の情れ程何の世



ふりの忘るべき若も此度狩場ふく討死をえざるならば永たせまでの記念とも見給へ  
 うーを鬚の髪を切く出ー々まば虎も涙と共ふ手に取のとりぬがらこいそも何と成行事  
 共や是程の大事を一人ほいまは母上も知せ給ひて心強思ひ立給ふ事数ならぬ童  
 が申共止り給ふべたう去ふく加様の大事をも心置きぬく知せ給ふこぞ嬉一々れ甲斐な  
 ら女の身なりとも夫の大事争う他ふ洩べた御心易思召せ是ふ付くも思ふよ叶ぬ  
 事なきども御物具の見苦きを見参らする折節を人々一た身なりせばぬどや便母も成  
 奉らんや賤心を盡し日を送りーふ世を捨て何國ともぬくならんと仰せらゆをこそ  
 身の置所なうりーに思ひも寄らぬ永き別路をならん悲しゆよとて聲も惜まを哭居たり  
 十郎も詮方なくして餘を敷ぞ人もお聞べうらん餘波を誰も同し心ぞを慰えり日  
 も既暮々れば今夜計の餘波ぞと思ひやるこぞ悲一々れ頃さへ五月の短夜の夢見る  
 程もほどろまで東にぬれびく機雲のさぬぐふなる曉を涙ふ床も浮ぬべ一幾万代  
 を重ても互の名残盡べきふあを祐成も道まで送り参らせんや羊毛の駒お抱さ乗せ

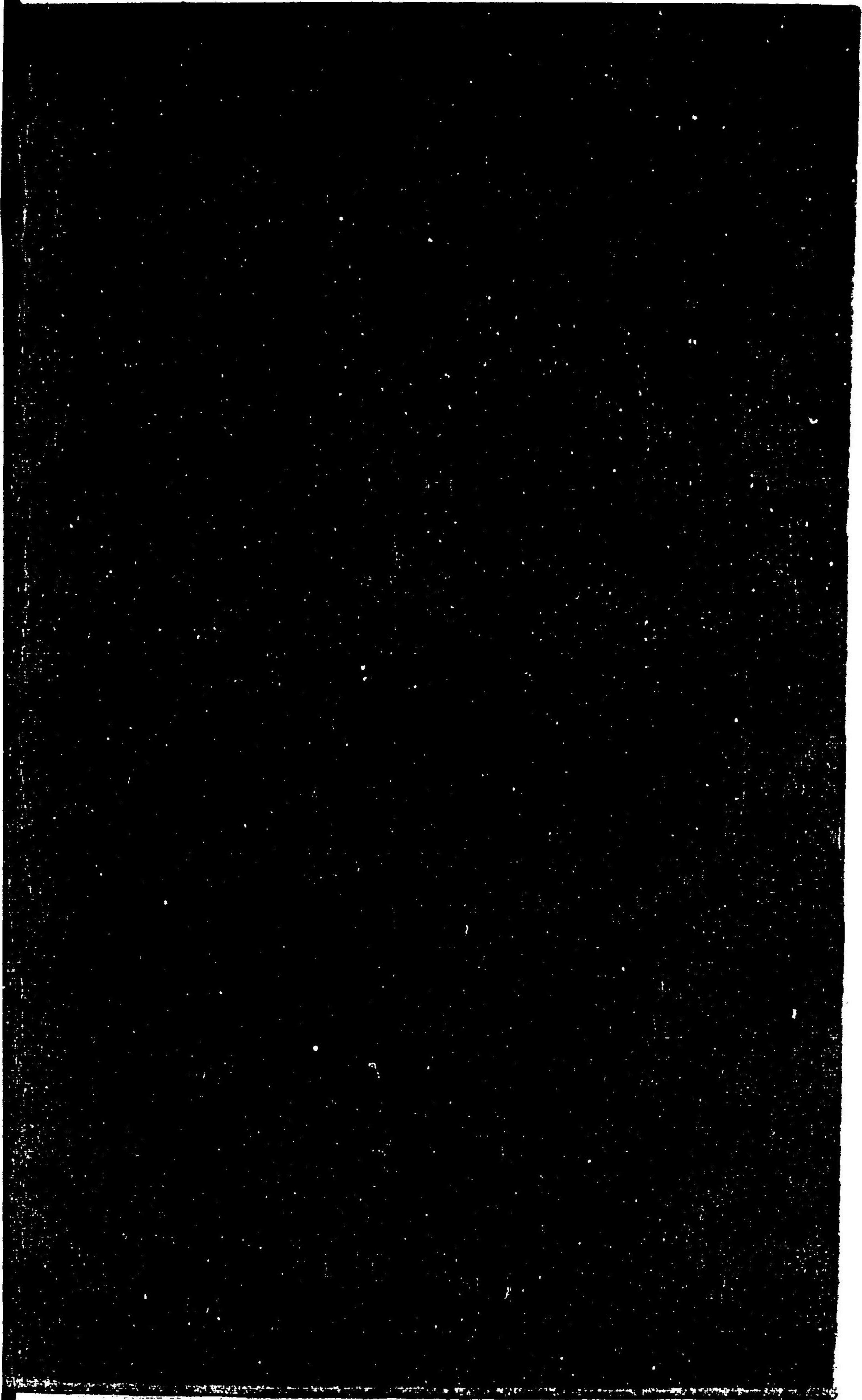
道三郎ふ口取らせうち連くこぞ送り々昔我を中村の界なる山彦山の嶺まで送米  
 く十郎爰ふ駒を扣へ今少しも送りたく候え共必を今朝より出んと定一うは必定  
 五郎の相待らんこぞ母く暇申はべーさうばといひく十郎を心強くも思ひ切和る袖  
 を引分て麓状さして引返は虎を涙ふうたくれく言葉さへうのさひば思ひの餘りふ道  
 三郎ふいひたる何事もいひうりはる事の有ーかど涙ふくきていひも盡さを取分暇  
 乞給へるよ返事せざりし心元なけまば今一度呼返して給ひ候えといひ々まば道三郎  
 も哀ふ思ひ急ぎ走り歸り遣ふ行たる十郎を呼返ーもとの峠ふ打上り何支ぞを問ひ  
 々まば虎を涙ふ目もくれく思ひ設一言の葉もいつ一う今うせ果て鞍の前輪ふ打懸り  
 消入やうふええたるが良ありて息の下ふくいひたるいつとぬく熱と契らぬ夕暮も駒  
 の足並聴れ音のする時を若やと思ふ折々の其人となく過行は其夜を空敷床一卧鶏  
 も海共ふな花明は夕べれ鐘の響みの暮る、便を待うひて不きれぬ袖の其儘ふえかなう  
 りたる契うな扱何の世よめぐり逢斯き思ひの又もやと盡せぬものぬ涙なり十郎分く



云へさ詞もな一某が心れ中推量給へ此世の縁お薄く共来世を必を一ツ蓮の縁を  
 結ぶべーいつ迄謂とも盡るべうらむ時刻移て叶ふゆとを思ひ切くぞ別々る虎を横  
 ふ手綱むらへ祐成の後姿れ隠る、まで見送りーが扱もあらぬ事をきば泣々大磯  
 母ど歸る々々

繪本曾我物語卷之八 終







特40

12

東 京 圖 書 館

和書門

小說類

函

別二架

一三號

八冊



特40

12

東 京 圖 書 館

八	一	別	小	和
冊	三	二	說	書
	號	架	函	門
			類	